

ソールとヤギ

伊 東 豊

Thor and his goats

Yutaka Itoo

ヤギは、スカンジナビア人にとって一定の宗教的あるいは神話的立場をしめる動物、北欧神話の主要神であるソールの動物だったと考えられている。両者の関係は『スノッリのエッダ』と『詩のエッダ』のなかで何回か言及されている。

1) 『ギュルヴィ幻惑』第 21 節ⁱ。「ソールは 2 頭のヤギを所有している。タングニョーストとタングリスニルという名前だ。そしてまた、彼はみずから駆るための車ももっている。ヤギたちがこの車をひくのだ。だから彼は<御者>ソールとよばれている。」

2) 『ギュルヴィ幻惑』第 44 節ⁱⁱ。「<御者>ソールはヤギたちと車で旅をした。……その夜、ソールはヤギたちをつかまえて、2 頭とも屠殺した。そのあと死骸から皮をはぎ、(その肉を)煮た。料理ができると、ソールは夕食の席についた。仲間たちもいっしょだった。……それからソールはヤギの皮を火から離れたところにおき、(宿泊している農場の)主人と家人たちは(ヤギの)骨をヤギの皮のうえに投げねばならない、と言った。主人の息子シャルヴィはヤギのふとももの骨を手にして、ナイフで裂き、骨髓にたっした。ソールはその夜、そこに泊まった。夜明けまえ、彼はおきあがって服を着て、(彼を象徴する武器である)ハンマーのミヨッルニルを手にし、それをふりあげて、ヤギの皮を清めた。するとヤギたちは立ち上がった。しかし 1 頭は、うしろ足の片方が不自由だった。」

3) エッダ詩『ヒュミルのうた』ⁱⁱⁱ第 20 節。「ヤギの君主はサルの末裔に船をもっと沖へだし、とたのんだ。」ケンニングとよばれるスカールド詩独特の比喩によって「ヤギの君主」が意味するものは、ソールにほかならない。

ロシアのスカンジナビア人居住地で発見された墓には、しばしばヤギが陪葬されている。その事実を M.A.メルニコヴァは、ヤギがソールの動物であることに注目し、以下のように解釈している^{iv}。

北欧人のあいだでもっとも信仰をあつめていたのはソールである。彼は世界の秩序を守るために巨人や怪物などをたおす戦神だった。したがってソールには、危険からの保護者としての

役割が期待されていた。それを象徴するのが彼の武器である「ミヨッルニル」^vと呼ばれるハンマーである。ひとつはハンマーのミニチュアを彼の神格の延長とかがえ、お守りとして身につけていた。それが考古学的遺物としてたくさん発見されている。

その守護が、スカンジナビア本土では現世に限られていたのにたいし、スラヴ地域では、故人の彼岸での守護にまで拡大されたとメルニコヴァは考えている。グニョズドヴォやチェルニゴフの埋葬墓からは陪葬されたヤギ（単数あるいは複数）が発見されている。さらにこれらの墓の遺体にはヤギの皮がかけられるか、遺体のうえあるいはそばに雄ヤギの頭蓋骨が置かれていた。ヤギはソールの動物であり、したがってこれらの儀礼はソールに守護を求めているのだと彼女は解釈している。わたくしたちがこの調査旅行で訪れたチョールナヤ・モギラ（ルーシ地域にある 10 世紀最大の埋葬墓）からも銅のソール像が発見されたそうである。

ソールと埋葬習慣の関連はスカンジナビアでは見られない。なぜスラヴ人地域でこの関連が生まれたか。それは「社会的分布」の問題だ、とメルニコヴァは説明する。もともと北欧神話において、死の神はオージンである。しかし彼は同時に支配階層の神でもあった。いっぽうでソールは、「奴隷 bonds の家系出身で、ほんのたまにしか戦争行動には参加しない、より低い階層」^{vi}の神だった。東方へむかったヴァイキングはこうした人々がほとんどであり、強いられて戦争に参加せねばならなかった。異邦人の土地で彼らがソールの守護を強く願ったのは当然であるし、やがて生前だけでなく死後の加護までも願うようになった、というのである。

スカンジナビア人にとっての辺境世界におけるソールの重要性については、すでにプレブソ・モイレングラクト＝セーアンセンが指摘している^{vii}。スカンジナビア人の叙述史料はソールによる世界蛇釣りの物語について何度か書きしるしているが、同時に彼らが各地に建てた考古学資料である石碑にもその神話を題材とした図像が描かれている。そしてその場所は、1ヶ所をのぞいて、すべてスカンジナビア人にとっての辺境に建てられている。世界蛇は自然や敵の象徴であり、それを釣りあげるソールはスカンジナビア人にとって未知の領域を克服する神でもあるからだと解釈される。

ソールがスラヴ人地域でも信仰を獲得することができたもうひとつの理由は、スラヴ人の神ペルーンとソールの類似である。ペルーンは火や水への信仰と関連があることも指摘されており^{viii}、ソールとの完全な一致がみられるわけではない。しかしもっとも基本的で重要なペルーンとソールとの類似点として、天空神（雷神）および軍神としての機能があげられている。比較神話学から再建されたインド・ヨーロッパ語族の天空神の名前 Tiwas は、インド・ヨーロッパ祖語の *deiuos* 「昼、日、天」からきている。この神は櫛 *perkus* に宿ると考えられ、結果として神名がスラヴ人のもとではペル・ウンに変えられた。このあたらしい名前は「(雷で) 打つ者」という意味だという^{ix}。ソール Þórr の語源は *þurma* 「雷」と関連する^x。ペルーンはスラヴ人にとってもっとも重要な神だったようである。そしてスカンジナビア人の到来によって、ソー

ルとペルーンが同一視されるに至ったのである。

おなじ機能をもつ神が同一視されるにいたるといふ一般的な説明をこえて、歴史的条件をとおして神の機能が変化していくという点に着目したメルニコヴァによる上述の指摘は非常に興味深いものである。しかしソールと死を関連づける信仰を、スラヴ地域にやってきたスカンジナヴィア人の特殊性と言うのはどのていど妥当であろうか。一般的にはソールは天空神・軍神・農民と世界の守護神であるが、スカンジナヴィア人のもとにおいても生命に、そしてひょっとしたら死とも、かかわっていた可能性がある。ヤギはどのような象徴的意味をもち、どのようにソールという神の機能とかかわっていたか。ソールはスカンジナヴィアにおいて、いかなる神だったか。そこではソールはたんなる戦神・軍神にすぎず、ほんとうに死とかかわりのない神だったのか。

スノリ・ストゥルルソンの『詩語法』はヤギについて、上述したソールとの関係だけではなく、ヤギについての印象的な別の神話を伝えている。巨人シャチの娘スカジは、殺された父親の復讐をはたすために、神々のすむアースガルズにやってきた。アース神たちは賠償のためにヴァン神のひとりニョルズを婿として渡した。さらに、「アース神が彼女のためになすべきこととして、和解そのものがあつた。それは彼女を笑わせることで、彼女は彼らにはそれはできないと思っていた。するとロキがヤギのひげに綱を結び、もういっぽうを自分の陰囊にむすんで、交互にひっぱり、悲鳴をあげた。そしてロキはスカジの膝にたおれた。すると彼女は声をあげて笑った。こうして彼女とアース神は和解にいたつた」^{x1}。このときヤギは、無意味に、なんとなく選ばれているのではない。水野知昭氏は、ヤギを「情欲・好色のシンボル」と捉えている^{x2}。先に引用した『ギユルヴィ幻惑』第44節や、比較神話学者ジョルジュ・デュメジルによる第二機能神ソールの第三機能への指向^{x3}などをあわせて考えれば、むしろソールの生命あるいは再生の神としての側面が想定されてよいだろう。

しかしソールが生/再生の神であるとしても、彼の象徴であるハンマーが副葬されるには、まだ距離があるかもしれない。ジョン・リンドウは川を渡る神としてのソールの性格を指摘しているが^{x4}、それは彼と死との象徴的な関係をしめすものと解釈することができるかもしれない。ソールは巨人を倒すために川を渡りウトガルズにゆくのだが、そこは巨人の世界というだけでなく、此岸にたいする彼岸、すなわち死の世界でもあるのだ^{x5}。

死後の世界についての信仰とソールとの関係を示唆する者もある。ヒルダ・ロードリック・エリスは、「一族のサガ」の一部や『ランドナーマ・ボーク』にみられる、人間が死後に山や丘のなかに住むという信仰に注目し、それは一定の地域的あるいは家族的性格をおびているとかがえた。そしてその地域ないし家族はソールへの信仰に深いかわりがあるというのである^{x6}。しかしこの「死の山」というモチーフについては、ヴァルホッル^{x7}観念への過渡形態であるという意見もあり^{x8}、また山や丘のなかの他界という民話的イメージはヨーロッパではけっし

てめずらしいものではない^{xi}。死とソールとの関連についてはさらなる検討が必要だろう。

仮にスカンジナビアでもソールへの信仰が死と結びついていたとしても、それはロシアにおもむいたスカンジナビア人の特殊性を否定するものではない。ソールについてたくさんの情報を伝えてくれる数多くの叙述史料を残したアイスランドでは、墓から発見された副葬品として、日用品のほかに動物が挙げられている。しかしその種類はウマとイヌのみで、ヤギは見つかっていない^x。アイスランドの農場で中心的な家畜はヒツジで、ヤギはけっして多くなかったようである。じっさい、遺跡からヤギの骨が見つまっているものの、数は少ない^{xi}。ヤギとヒツジのエサはアイスランドでは競合し、そこでは二次生産物としての羊毛が重要だった。ヒツジには食べることができず、しかしヤギなら食べることができる植生が存在するグリーンランドでは、アイスランドよりも多くのヤギの骨が発見されている^{xii}。

ヤギに象徴的な意味が認められるとしても、それがつねにソールと関連づけられるともかぎらない。「一族のサガ」にあらわれる動物について調査をしたシモン・H・テウシェルは、サガのなかではヤギが臆病者の象徴として利用されていることを指摘した^{xiii}。『ヴァッラ・リョートのサガ』の主人公リョートがハッリに戦いを挑むが、ハッリはそれを避けようとする。するとリョートは「彼（ハッリの祖父カルル）はけっしてヤギのように追い回されるままではいなかった」^{xiv}と挑発している。いっぽうで、ヤギは神話上、ソールだけでなくオージンのもとでも登場する。スノッリの『ギュルヴィ幻惑』によると、ヴァルホルルの屋根のうえにはヘイズルーンという名前のヤギがいて、オージンにつかえる勇士たちに蜜酒をあたえるという^{xv}。ヤギのもつ象徴的意味はかならずしも一定しておらず、ただちに結論をもとめることはむずかしい。

副葬品としてのヤギに象徴的な意味があったともかぎらない。H. R. エリス・デヴィッドソンは、ヘーゼビューで見つかった供犠のけものとしてのヤギ（あるいはヒツジ）にふれて、「うたがいなく金のかからない供犠の一形態として人気があった」^{xvi}としている。宗教的・神話的・象徴的理由より、経済的・環境的理由のほうが重要だったかもしれない。しかしそれを証明するには、ロシアで家畜としてのヤギがいかなる立場にあったかを知ることが必要である。それはたんにヤギについてだけでなく、家畜の種類・利用法などをふくめた生業ぜんたいの調査を必要とするだろう。

ⁱ (ed.) Anthony Faulkes, *Edda: Prologue and Gylfaginning* (London, 1988), p. 23.

ⁱⁱ (ed.) Faulkes, *Ibid.*, p. 37.

ⁱⁱⁱ 'Hymiskviða' in Guðni Jónsson, *Eddukvæði*, 1. hluti (Akureyri, 1954), bls. 138.

^{iv} E. A. Melnikova, 'Reminiscences of Old Norse Myths, Cults and Rituals in Old Russian Literature' in *Proceedings of 11th International Saga Conference 2-7 July 2000, University of Sydney: Supplement* (Sydney, 2000), pp. 29-36.

^v Mjöllnir. 古北欧語の mjöll 「新雪」に由来するとされる（したがって「まるで新雪のように白く輝くもの」=「雷」）が、古スラヴ語 mlunuji、ロシア語 molnija（どちらも「雷」）と関係すると考える

- 者もある。Rudolf Simek, *Dictionary of Northern Mythology* (Suffolk, 1996), pp. 219–220; Jan de Vries, *Altnordisches etymologisches Wörterbuch* (Leiden, 1962), S. 390.
- vi Melnikova, *op. cit.*, p.31.
- vii Preben Meulengracht Sørensen, 'Thor's Fishing Expedition' in (ed.) Gro Steinsland, *Words and Objects* (Oslo, 1986), pp.257–278.
- viii Boris Aleksandrovic Rybakov, 'Die Kultur des mittelalterlichen Nowgord' in Joachim Hermann, *Wikinger und Slawen* (Berlin, 1982), S. 249.
- ix 『世界歴史大系 ロシア史』第1巻(山川出版社、1995年) 46–47頁。森安達也編『スラヴ民族と東欧ロシア』(山川出版社、1986年) 347頁。
- x Ásgeir Blöndal Magnússon, *Íslensk orðsifjabók* (Reykjavík, 1989), bls. 1186.
- xi (ed.) Anthony Faulkes, *Edda: Skáldskaparmál*, vol. 1(London, 1998), p. 2.
- xii 水野知昭『生と死の北欧神話』(松柏社、2002年) 160頁。
- xiii ジョルジュ・デュメジル著、松村一男訳『神々の構造』(国文社、1987年) 94–97頁。彼が主張した「インド・ヨーロッパ語族の三区分イデオロギー」とは、インド・ヨーロッパ語族に共通する世界観についての説明で、彼らは世界をみつつの要素(=機能)からの構成物だと考えていたという。すなわち神聖性・主権性にかかわる第一機能、戦闘・力強さにかかわる第二機能、生産性・豊饒性・平和などにかかわる第三機能である。ただしデュメジルは、第二機能神ソールのもつ豊饒的(すなわち第三機能としての)性格は「彼の大氣的戦闘および槌による武勲の好ましい副産物である降雨によってのみなのであって、発芽をもたらすある種の力によってではない」(ジョルジュ・デュメジル著、松村一男訳『ゲルマン人の神々』(国文社、1993年) 139頁)としている。しかし『ギョルヴィイ幻惑』第44節を考えれば、ソールを軸とした死と再生の物語がかんがえられてよい。
- xiv John Lindow, *Handbook of Norse Mythology* (Santa Barbara, 2001), pp. 290–291.
- xv ミズガルズ/ウートガルズという北欧人の二元的宇宙観については、次のものが代表的である。Kirsten Hatrup, *Culture and History in Medieval Iceland* (Oxford, 1985).
- xvi Hilda Roderick Ellis, *The Road to Hel* (Westport, 1943), pp. 87–90.
- xvii 北欧神話に登場する館の名前。戦死した人間たちが北欧神話の主神であるオージンによってこの館にあつめられ、世界に終わりをもたらす巨人たちとの戦いにそなえて訓練をつづけているという。
- xviii フォルケ・ストレム著、菅原邦城訳『古代北欧の宗教と神話』(人文書院、1982年) 231–232頁。
- xix ジャックリーヌ・シンプソン著、橋本楨矩訳『ヨーロッパの神話伝説』(青土社、1991年) 76–83頁。
- xx Kristján Eldjárn, *Kuml og haugfé*, 2. útgáfa (Reykjavík, 2000), bls. 301–302.
- xxi Thomas Amorosi, 'Contribution to the Zooarchaeology of Iceland: Some Preliminary Notes' in (eds.) E. Paul Durrenberger & Gísli Pálsson, *The Anthropology of Iceland* (Iowa, 1989), pp. 206–209.
- xxii ジェイムズ・ラッカム著、本郷一美訳『動物の考古学』(学芸書林、1997年) 100–102頁。
- xxiii Simon H. Teuscher, 'Íslendingenes forhold til dyr i høymiddelalderen' *Historisk tidsskrift* 69 (1990), s. 319–320.
- xxiv *Íslensk Fornrit* 9 (Reykjavík, 1956), bls. 245.
- xxv (ed.) Faulkes, *op. cit.*, p. 33.
- xxvi H. R. Ellis Davidson, *Myths and Symbols in Pagan Europe* (New York, 1988), p. 56.